

古代ケルト人の宗教性

— Druidism を中心にして*

松 田 誠 思

「古代ケルト人の宗教性」という大きな題を掲げておりますが、ケルト学者でない私ごときが、いきなりこのような話題でお話しするのは不遜であり、滑稽でもあります。このような問題を扱うには、比較言語学や考古学、宗教学や神話学など、いくつもの学問分野にまたがる知識が必要ですが、そのいずれについても私はごくわずかの知識しか持ち合わせておりません。近・現代のアイルランド文学を多少かじっているにすぎないにもかかわらず、なぜこのような話題をあえて取り上げてお話申し上げることにしたか、その理由を最初に少しご説明致します。

アイルランドの詩人 W. B. Yeats が最晩年に、アイルランドの歴史の背景をなしているものを一つの大きなタペストリーになぞらえて、おおよそ次のように言っています。このタペストリーには様々の模様が織り込まれているけれども、キリスト教という宗教は、この壮大なペストリーに織り込まれた模様の一つであるにすぎない。それ以前の druidism ドルイディズムの模様がどこで終わり、キリスト教という新しい模様がどこから始まっているかは、誰にもしかとは見分けられないと言うのです。¹⁾ 5世紀の半ばにキリスト教が伝えられて以後(432年、St. Patrick)、アイルランドは急速にキリスト教化したけれども、それ以前の多神教的風土がキリスト教の一神教的教義に完全に取って代わられたとは言えない。むしろ両者が排

* 本稿は、日本ケルト学会議：西日本支部例会(2004. 11. 20 於神戸学院大学)における講演草稿に基づく。時間の関係で当日は触れなかった事柄を、若干加筆したことをお断りする。

他の関係に立って排除しあうのではなく、対立しながら混じり合う中世の長い時間が経過するうちに混交し、一種不思議な模様が形成された。アイルランドの歴史の独自性は、そういう元来は異質であったものが重層的に重なり合って第三の新しいものを作り出したところにあると、そうイエイツは確信していた。彼の文学活動は、生涯一貫してこれを土台に展開されたと言って差し支えありません。彼は単純な「ケルト」復興論者などではありませんが、キリスト教に一元化することのできないものが、20世紀になってもなおアイルランドの精神風土にあることを見て取っていたと言えます。

たとえばイエイツが死の床で書きつけた遺言のような詩の中に、古代アイルランドの習俗に従って直立不動の姿勢で埋葬された戦士たちのイメージが出てくる。²⁾ しかもそれは、死を前にしたイエイツに、謎めいた問いかけをするような形で用いられている。のみならずこれと並行して書かれたもう1篇の詩には、古代アイルランドの英雄 Cuchulain クフーリンがこの世での闘いに力尽きて、死者たちによって冥界に迎え入れられる特異な光景が描かれている。³⁾ その意味合いを考えると、どうしても古代ケルト人の、と言うよりも古代アイルランド人の、と言うべきでしょうが、その宗教性の問題にぶつかります。

別の例をもう一つ挙げますと、劇作家 John M. Synge の場合です。彼もまたアイルランド人に特有の精神構造に強い関心を抱いていて、それがいわゆるケルト的なものにも、キリスト教的なものにも一元化できない基盤の上に成り立っていることを見抜いていました。その意味ではイエイツとよく似た問題を共有していたと考えられます。ご承知のように、シングの家系はアングロ・アイリッシュの典型的なプロテスタント・アセンダンシーに属していましたが、一家の中で彼だけが青年期に家庭の宗教である福音主義派のキリスト教信仰を捨ててしまった。しかしそれは近代ヨーロッパのデカルト的合理主義に基づく選択でもなければ、キリスト教以前の、そう言ってよければケルト的心性に先祖返りすることでもなかった。むし

ろ、彼の持って生まれた感性には、キリスト教との対比で言えば汎神論的と言うか、あるいは自然神秘主義的とも言うべき傾向が強かった。従って、精神と身体を分けてしまう伝統的なキリスト教会や近代の二元論的な思考が、何かとてつもない間違いを犯しているのではないか、という疑念があったに違いありません。

それを乗り越えるための糸口はなかなか見つからなかった。しかしシングは長い放浪生活の後、アラン島 (the Aran Islands) の住民たちの中にアイルランド的精神の祖型とも言うべきものを見いだしたのです。現在のアラン島は相当に観光化されていて、シングがそこを訪れた今から100年ほど前とはまるで違った様相を呈しているようですが、19世紀末頃の島民は、キリスト教化されていたとはいえ、生活と風土の至るところに古代アイルランドが息づいていたと言えます。比喩的な意味ではなく、何千年も前の石器時代における自然と人間との関係が、そのまま現代に露出しているという印象を、シングは抱いたにちがいない。たとえばアラン島の人々が、死者を埋葬し弔う際の儀式的な一連の手続き、身振りや泣唱 (keen-ing) や祈りの中に、あるいは炉辺で語られる妖精や亡霊にまつわる昔話の中に、この島に太古から積み重ねられてきた人間経験の揺るぎない証がある。どのような宗教的教義や合理主義的解釈をもってしても、決して掬い取ることのできないような深い層が人間の心情の中にあることを、シングは確信したと思われます。彼はキリスト教信者であることはやめたけれども、ケルト主義者にもナショナリストにもならなかった。何度か訪れたアラン島での経験によって、むしろ人間の生死の意味合いを探求する真の宗教性に目覚めたと言えるでしょう。その内実を確かめようとすると、やはり古代ケルト人の宗教性の問題を考えざるをえない。そういう次第で、私もこの問題に強い関心を抱くようになりました。しかし「古代ケルト人の宗教性」と申しましても、以上のような私のきわめて個人的な関心の持ち方と、わずかな知識の範囲内でのお話にすぎないことを、あらかじめお断りしておきます。

ところで、最近特にブリテンの考古学者から、ブリテン諸島とアイルランドにおける「ケルト人」とか「ケルト文化」の伝統的な概念規定とか、ケルト人の大陸からの移住について通説に異議を唱える「島ケルト Insular Celts」否定論というものが提起され、それに対する批判と反批判の激しい応酬があって、専門家の間だけでなく政治的意図が絡んだジャーナリズムの問題にまで発展しておりますが、どちらの説の妥当性が高いのか、素人の私には判断することができません。⁴⁾ただ、ヨーロッパ大陸のものであれブリテン諸島・アイルランドのものであれ、「ケルト的」と言われるいくつかの文化的構成因が、古代アイルランドの文化にも認められることについては、大方の意見が一致しているので、今日の話題の中心は古代アイルランド人の宗教性になりますが、表題にはあえて「ケルト人」というもう少し広い概念を用いました。「ケルト人」という名称を、人種・民族の集団としてとらえるよりも、文化の中心に共通の構成要素をもつ文化集団としてとらえるならば、このような用語法はあながち間違っているとは言えないと思います。ケルト人はヨーロッパ中央部の the Danube ドナウ川流域から各地に移動しているので、純粋な人種としてのケルト人を想定するのはむずかしいが、大陸の広い地域に定住し、その一部はブリテン及びアイルランドの島嶼にも移住したかもしれない。それも含めて多くの部族の中で、他人種の文化的影響を受けながら、最後まで一定の文化的特長を共有し保持している部族集団を、ここではケルト人と呼ぶことにします。

ケルト人と総称される大陸の諸部族は、石や金属に彫りつけられた少数の碑文・銘文の類を別にすると、自ら書きつけた文字資料をまったく残していません。この観点からすれば、ケルト文化を知るための重要な手掛かりになるのは考古学的資料です。大陸のケルト人の習俗を記したギリシア・ローマ人の文章の断片も、中世になってキリスト教の修道士によって筆写されたアイルランドとウェールズの神話・伝説や法律文書の類も、いわば間接的な二次資料だからです。Stuart Piggott によれば、「ケルト文化の

存在を証明するのは、基本的には考古学的なもの」であり、「考古学の証拠の中で最も直接的で信頼できる情報はひとつの社会の『技術』の痕跡である」と言う。⁵⁾ 建物や墓地の遺構、生活と食糧確保のために用いられた道具類、戦闘のための武器、その他死者とともに埋葬されたさまざまな副葬品などから、われわれはそれを作り出した人々の技術水準を推定し、技術に裏付けられた生活様式とか経済活動を推論することができます。場合によっては、そこからさらに推論を進めて彼らの作っていた社会構造を想定することができるかもしれない。しかし考古学的資料のみから、当時の人々の宗教とか死生観の内実にまで踏み込んで、これを復元するのはきわめてむずかしく、文字による何らかの補助テキストと関連づけないかぎり、物的資料の沈黙を破ることはできない。ピゴットは、カテゴリーの異なる資料を関連づける推論は慎重に進められなければならないと、その作業は困難を極めるが、不可能ではないと言います。その信念に立って粘り強く地道な考証と推論を重ねた成果が、1968年に出た彼の名著 *The Druids* です。ピゴットに先だって、考古学的資料と文献資料を関連づけてドルイディズムを検証し、ケルト人の宗教性を論じた先駆的研究者に Thomas D. Kendrick (*The Druids: A Study in Keltic Prehistory*, 1927) があり、ドルイディズムに関する古代ギリシア・ローマ人の文献資料を批判的に検討し、研究の土台を再構築した人としては Nora K. Chadwick (*The Druids*, 1966) がいます。これら先覚者の知見はもちろん、その後のすぐれた研究をも参考にしながら、ケルト的宗教性の一端を、ここでは古代アイルランド人に即してドルイディズムの観点から考えることにしたいと思います。

ケルト人の自然観と宗教意識

ケルト人の宗教性を考える上で、なぜ Druids ドルイドとか Druidism ドルイディズムを重視するのかについては、20世紀におけるドルイド研究の古典的文献の一つ *The Religion of the Ancient Celts* (1911) の著者

J. A. MacCulloch の捉え方が参考になるかと思えます。彼は膨大な文献資料を渉猟して、20世紀の初めにケルト人の宗教性を考えるための土台を作りました。彼の所説は、その後の考古学的発見によって修正された点もありますが、最も重要な論点を明快に指摘していて、今なお多くの示唆を含んでいます。

ケルト人は信仰とその実践について、いっさい記録を残していないし、ドルイドの書かれざる詩は彼らの死とともに消滅した。しかし残された断片を通じて、ケルト人が〈神〉の探求者であり、見えざるものに強い絆で結びつけられ、宗教的祭祀と魔術によって知られざるものを征服しようと切望していたことがわかる。霊的な事柄はケルト人の魂に強く訴えかけた。古代ギリシア・ローマ人が彼らの宗教性に強く打たれたゆえんである。彼らは神々の定めを忘れてたり、犯したりすることはなく、神々の意志と無関係に幸運が訪れるとは考えなかった。ケルト人のドルイドへの服従は、宗教的な事柄において彼らが権威を進んで受け入れていたことの証であり、ケルト人の居住する全領域に見られる特長は、しばしば迷信に陥りがちであったとはいえ、信仰への熱意が顕著であること、理想と失われた大義への忠誠心である。死後の理想郷への信仰から明らかなように、ケルト人は天性の夢想家であり、ヨーロッパ文学のいくつかを特徴づける霊的でロマンティックな傾向は、ケルト人のもたらしたもののなのである。⁶⁾

ここで指摘されているケルト人の宗教性は、彼らが〈自然〉をどのように見ていたかに集約されます。すなわち彼らにとって〈自然〉は、目の前に現れていると同時に、つねに測りがたく「見えざる」神秘を秘めたものとして立ち現れてくる。限りない恵みを与えてくれるものであると同時に、限りない驚異と恐ろしい破壊力をもって人間をのみこむ危険性を絶えずもっている。その二つが切り離せない一つの全体的生命としての自然、そうい

うものとしての自然に彼らは向かい合っている。もう一つは言うまでもなく、この世界を単にもの＝物質として捉えるのではなく、物質に宿る生命として捉える。あるいは物質に還元できない霊的な働きが、万物の生命の根本にあるという認識です。そしてそのような認識に立てば、自分自身はいったいどこから生まれてきたのか、自分の霊と肉はどのような関係にあるのかがきわめて重要な問題であり、それが死後にはどうなるのかという、死後の生命の可能性への関心が当然生まれてくるでしょう。このような意識は、おそらく多くの古代人に共有されていたと思われませんが、マカロックはその意識の度合いがケルト人の場合は非常に強いことに注目している。そしてこれらの問題を抽象的な思弁によってではなく、日常生活と密接に関わる習俗はもとより、政治や法律の実際に即して考え、かつ処理する専門家がドルイドでした。ドルイドがケルトの部族社会でどのような位置を占めていたかは、大陸ガリアの場合とブリテン諸島、特にアイルランドの場合とでは若干異なるようですが、宗教上の祭事・祭式の執行者であるだけでなく、政治や司法や教育などに強い発言権を持っていた点では、ほぼ同じであったと言えます。

Druidism の起源論

部族社会における制度としてのドルイディズムの起源については、ケルト以前からブリテン諸島に定住していた先住民にあるとするもの、ガリア各地のケルト人にあるとするもの、あるいはケルト以前の先住民とケルト人の宗教・祭式の混淆によるという説がありますが、ブリテン島のみ起源を限定する説は、現在では否定されています。しかし大陸起源説についても、それがケルト以前の部族に淵源するのか、ケルト人とケルト人に征服された先住民の習俗・祭式の混淆によるものであるのか、あるいは純粹にケルト人の宗教・祭式であるのかは、決定的な証拠がなく不明です。起源がいずれであるにせよ、ドルイディズムは、ガリアからガラティアに及

ぶヨーロッパ大陸と、ブリテン諸島・アイルランドのケルト社会に広く見られる重要な構成要素であり、人々の死生観にも強く影響したと考えられます。ただし大陸におけるよりもブリテン及びアイルランドのドルイディズムの方が、部族の移動とか他民族との接触や支配による変化の波にさらされる度合いが少なかったために、より原型的なものを保持することができた。それに対してガリアのケルト諸部族は、ローマによって征服されたために、考古学的資料をのぞいて、社会生活の消息を知る手掛かりがほとんど消滅したことは、周知の通りです。⁷⁾

ケルト社会の階級構造

大陸ガリアとアイルランドのいずれにおいても、ケルト社会の階層構造は類似していたと推定されています。従ってギリシア・ローマ人がガリアのケルト社会について記述した事柄は、おおむねアイルランドについても当てはまると見なしてよい。それによると最も主要な社会の構成単位は「部族」tribes (= *Gk. ethne* エトネ、*Lat. civitates* キウィタテス) で、下位区分として地縁・血縁に基づく小集団＝「氏族」clans (*Lat. pagus* パグス、*pl. pagi*) があり、部族を統率する王と王族の下に、次のような三つの階層があります。

1. 貴族（領主）・戦士 (*equites* エクィテス) 王のもとに長老会議を構成する。
2. 祭司及び知識人 *druids* ドルイドはこの階層に属する。詩人＝*bardoi* バルドイ、予言者＝*vates* ヲァテス、占い者＝*manteis* マンテイス、及びその他の専門的技能者。
以上二つの階層は土地を保有する自由民。
3. 平民＝*plebes* プレベス 領主・族長に隷属し、土地を持たない農民・漁民・牧畜民など。

ただし、ガリアとアイルランドでは「知識人・職能者階級」を指す名称

に若干の違いがあります。アイルランドでは、file (*pl. filid*) フィリがドルイドと同じ知識人の階層に属し、AD 4～5世紀までの神話を後世に語り伝えた。本来詩人・語り部であり、古来の系図学や物語に通暁し、7～12年の修行期間に作詩法を学んだ。その職能には宗教的な見者・占卜者・予言者としての役割が含まれ、呪文詩によって部族の掟の侵犯者を罰し、死をもたらすこともできた。フィリはまた立法と法の執行権限を持ち、キリスト教の渡来以後は権威を失ったドルイドの権限を受け継いだだけでなく、bards (歌い手、特に王や英雄を賛美する歌い手) の役割も兼ねるようになった。アイルランドにおいては、filid フィリは高位の詩人であるが、占いと予言を事とする fáthi ファーヒーとほぼ同一の地位にあったと考えられ、かつ両者の役割は重なり合っていたとも解釈できる。そしてフィリ・ファーヒーは、ガリアのケルト社会における vates (ウァテス 自然現象の解釈と予言・生贄の供儀に携わる者) に相当する。従ってガリアにおける druids、vates、bards の3つの階層は、アイルランドにおける druids、filid = fáthi、bards の3階層に相当するものと考えられる。アイルランドのフィリは、キリスト教化が進行した5世紀以後は、勢力の衰微したドルイドとバードの役割をも一身にそなえて、見者・詩人・教師・王の顧問・契約の証人など聖俗いずれにおいても重要な役割を担う者として、17世紀まで存在しました。ちなみに、古代アイルランドの女神 Brigit ブリジットは、後にキリスト教の聖人に列せられたが、癒し・技芸・詩のみならず占いと予言を司り、フィリの守護神でした。⁸⁾

ケルト社会におけるドルイドの位置

古代ケルト社会におけるドルイドの位置と役割は、同じインド・ヨーロッパ語族間の文化に例を求めるとすれば、古代インドのヒンディ社会におけるブラーミン (Brahmins) の位置や役割に相当すると考えられます。⁹⁾ ブラーミンは知識人であり学者であって、宗教的祭式を司ったが、その役

割は単に宗教的儀式の主宰だけに限られていたわけではない。ケルト社会におけるドルイドの位置と役割もこれとほぼ同じであって、戦士集団と並んで社会の上層部を形成し、王や族長を中心とする支配階層に属していました。ドルイディズムについてギリシア・ローマ人が書き残している記述によると、ガリア諸地域のドルイドは、非常に広汎な社会的・宗教的任務を果たす専門家集団でした。すなわちあらゆる知的専門職に従事する者がそこに含まれていて、宇宙の神秘を探求し、見えざる神の声を聞くことのできる者、占い・予言能力を持つ者、裁判官として罪を裁き係争の仲裁を行う者、国王や族長の側近としてほとんどすべての重要問題の決定に関与する政治的顧問、医術や薬草の知識に長けた治療者、さらには部族の系譜や勲（いさおし）を語る語り部、吟唱詩人、暦法・慣習法など共同生活の基礎的知識を伝授する教師などです。男性だけでなく女性のドルイドもいたことがアイルランドの資料から知られていますが、彼／彼女たちは兵役に服する義務や納税の義務を免除された特権階級で、ドルイド自身が王や族長の地位につくこともあったが、王のすべてがドルイドだったわけではありません。

基本的には世俗の権力者である王や族長と違って、ドルイドは知られざる神々の声を聞き、測りがたい神意を読み取って人々に伝える特別の任務を帯びていて、時には部族全体の命運に関わる問題の処理において、王や族長と対立することも十分あり得た。共同体の危機に際しては、これを乗り越えるための祈願・供犠（生贄）を主宰し、〈神々と人間との仲介者〉として振る舞ったと言えます。当然のことながら、このような仕事の重責に耐える資質と能力を身につけるためには、自然の神秘と社会の成り立ちについて学ぶ長期間の修業が求められたはずで、ドルイドは、身分的にも資質的にも貴族・戦士・知識人などのエリート層から選ばれたと推定されます。

ドルイドは、あらゆる知識と技術の文字による伝達を禁じていたので、その実態をうかがう情報源は、ガリアとブリテンの一部におけるドルディ

ズムに関するギリシア・ローマ人の断片的記述（最もまとまった形のものとしては、Julius Caesar ユリウス・カエサルの「ガリア戦記」第6巻の記述）と、キリスト教の渡来以後、主として7～12世紀にキリスト教の修道士によって筆写された初期アイルランド、ウェールズの物語・詩文等の文献資料だけであり、これを考古学的資料と関連づけることによって、謎に包まれたその実態に手探りで近づいていくほかありません。ただしドルイド自身によるドルイディズムに関わる宗教的・世俗的事柄の記述は皆無ですが、大陸のケルト社会においてはギリシア語、ラテン語による記述までもが厳禁されていた形跡はない。しかし確実な資料が絶対的に不足していることに変わりはなく、論者の利用する資料により、また文献資料と考古学的資料の評価の仕方と、それらをどう解釈しどう関連づけるかによって、様々の解釈が流通しているのが現状のようです。

しかし、18世紀以後にヨーロッパ人の間に復活してきたドルイディズムへの関心と、それに付随して作り出されたさまざまな解釈や伝説は、恣意的な想像の産物であるものが多く、古代末期から中世初期にかけて成立した文献資料と同列に扱うことはできないし、古代ケルト人の宗教性を考える上では必ずしも参考にならない、というのがほとんどの専門家たちがとっている立場です。（ただし Stuart Piggott のように、考古学的資料は別として、古代ギリシア・ローマ人の記述もアイルランド中世の文献資料も含めて、あらゆるドルイディズムに関する言説は、記述者・観察者の対象に対する態度とか主観的評価基準に基づくものであり、ドルイディズムについての客観的事実の陳述ではないのだから、18世紀以後の言説だけを「根拠に乏しい」との理由でその信憑性を否定するのは妥当でない、という立場を取る学者もあることを付言しておきます。）

ドルイディズムの基本思想

さて、ケルト人の宗教性を考えるために、ドルイディズムとドルイドに

関して一般に受け入れられている説に従って、二、三のことをここでご紹介してみたいと思います。

最も原始的な形態での宗教は、自然の事物や現象の中に宿っている霊的な力、すなわち自然の中に顕現する生命の根源的力に対して、人間が抱く畏敬と崇拝から生ずると考えられますが、その生命の根源力は、自然の中に深く隠されている〈超自然〉の働きから由来するという認識は、古代人にかなり普遍的に見られます。そのことは、人知を越えた〈神〉とか〈神々〉の存在を想定し、そういう言葉を用いてこの生命の神秘を語ろうとしたところに端的に示されています。中でも重要なのは農業の土台となる〈大地〉であり、生命の母体である大地を〈神〉とし、これによって生ずるすべての植物の霊に対して敬虔な祈りを捧げる行為となって表れてきます。それは、種蒔きや苗を植える際の豊穰祈願の祭式となり、穀物の実りに感謝を表す収穫祭という形を取って定着する。季節毎の農神祭は、植物神のみならず動物の成長と多産を司る他の神々とも結びついて、農業と牧畜を生業としたケルト人の宗教行事の中心でした。アイルランドではまた、王となる者が作物の豊穰や動物の繁殖に深く関わる、と考えられていたことを示す事例が文献に見えている。¹⁰⁾

このほかにケルト人が信仰の対象として特に重視したのは、天空の〈太陽〉と〈雷〉、地上においては〈水〉です。ケルト発祥の地はドナウ川 (the Danube) の源流であり、Danu ダヌー女神にちなんで命名されたと言われます。ガリア、ブリテン、アイルランドの各地の川には、起源神話に基づいて命名された川が数多くあることはよく知られています (アイルランドでは the Boyne、the Shannon などが代表的な例)。またアイルランド各地に〈癒し〉と〈浄化〉の効験あらたかな水の湧く「聖なる泉」があり、古くからその霊験が信仰の対象となり、巡礼地となっているものも数多く存在します。しかし〈水〉や〈火〉に限らず、総じて万物に霊的生命が宿っているという認識は、ケルト人の信仰の根本にあると言えるでしょう。

そして、形ある自然界の事物に靈的生命を与えているのは、目に見えない〈超自然〉の力であり、自然はその力と密接に結びついていると考えられた。従ってケルト人が〈超自然〉をどのようにして認知していたかを、文献と考古学的資料から理解することができれば、彼らの信仰と祭式においてドルイドがどのような位置を占め、どのような役割を果たしていたかがかなりはっきりとわかるはずですが、残念ながらそれはいまだに謎に包まれています。ドルイドに関する何らかの事実を追跡するために、考古学的資料を用いる場合は、慎重に取り扱わねばならない。ドルイドに直接関わると断定できる資料は皆無だからです。唯一ドルイドの日常的業務と関係があり、部族社会の日常生活における規範であつと思われる重要な資料は、フランス東部の Coligny コリニーで発見された「ケルト暦」です。紀元前2世紀の終わり頃のものとして推定され、青銅版に「吉日」と「凶日」とがガリア文字（大陸のケルト語）で記されていて、ドルイドはこれを占いや祭儀の執行に当たって用いていたと考えられます。¹¹⁾

しかし彼らが月の^み盈ち^か虧けの周期に基づく暦法をなぜ採用したのか、それをどのように利用していたかの詳細は解明されていない。ケルト人の四つの大祭が、この暦に基づいて行われていたことは間違いありませんが、それぞれの祭でドルイドがどのような役割を果たしていたのかは明かではありません。しかし、農耕・牧畜に関わる重要な祭礼を主宰し、一定の方式に従って生贄を捧げる儀式を執行したのがドルイドであることについては、研究者の間ではほぼ意見が一致しています。

もう一つの重要な点は、ケルト人はユダヤ・キリスト教のような創造神話を持っていないことです。人間は〈神〉によって創造されたというよりは、〈神〉の子孫であり、地下世界に存在する〈豊穡神〉こそが人間の先祖であるとみなす。ケルトにおけるその〈神〉の名称は特定できませんが、あらゆる人間の生みの親であると同時に、死後すべての人間はこの地下の〈神〉のもとに帰るとされます（ユリウス・カエサルはこのケルト的地下の「神」を、ローマ人の神ディス（Dis Pater）に比定している）。¹²⁾ ケル

ト部族の中には、氏族や家系の元祖はもとより、個々の人間の先祖を特定の神々に求めたり、特定の神聖な動物や植物に求めたりする例はありますが、キリスト教的な超越神による天地創造に類する神話は伝えられていません。このことは大陸のケルト人についても、ブリテン諸島・アイルランドのケルト人についても当てはまります。人間その他万物を造りなした超越的な造物主を問うのではなく、事物の起源、部族の元祖を問題にするところに、ケルト人の世界観の基本形があると言えます。

アイルランド最古の起源神話は、*Leabhar Gabhála* (*The Book of Invasions* 『侵略の書』、AD 11世紀に写本成立) に見いだされます。ここには海のかなた(それがどこであるかは明かでない)からやってきた、それぞれ異なる部族による侵略と戦いが物語られ、侵略の度ごとに新しい技術や知識が到来したこと、そして島に新しい事物が次々に作り出され、かつ名づけられてゆく経緯が語られています。しかし、アイルランドに定住し古代社会を形成した部族と追放された先住部族との関係や、アイルランドに成立した部族社会の支配的な傾向・価値観を知る上で特に重要なのは、5番目にやってきた Tuatha Dé Danaan トゥアサ・デ・ダーナン＝ダヌー女神一族と、6番目にやってきてダヌー女神一族を打ち破り、最終的にアイルランドの覇権を握った the Milesians ミレシウス(=Milé ミール)一族です。

〈光〉と〈善〉の女神ダヌー女神族は、アイルランドに上陸して、邪悪な先住民 the Fomoríi フォモール族と戦い、激烈な戦いの末に〈闇〉と〈悪〉の女神 Domnu ドムヌの子孫であるフォモール族を追放する。ただフォモール族は島から追放はされるけれども、絶滅したわけではない。地上世界をダヌー女神族に明け渡して、いわば地下に潜る。消滅したのではなくて、住処を地下に移し、地下世界で生き続けます。ところが、それから約200年間支配者の地位にあったダヌー女神族が、先住民のフォモール族と同じ運命をたどる。すなわち、次にやってきたミレシウス族との戦いに敗れて、支配者の地位を追われ、その後の住処をどうするかについて、

勝者と敗者の間で協定が結ばれます。興味深いのは、敗れたダヌー女神族のうち、ある者は海のかなたの海底に、またある者たちはアイルランド島内の丘や湖の下にある〈他界〉に住まいを配当され、一方ミレシウス族は地上の支配者となって島を領有し、定住するようになることです。

これら一連の神話に見られる古代アイルランド人の世界把握の特色は、言うまでもなく第一に多神教的な点にある。唯一絶対の神などという観念はどこにも見いだせない。彼らは人間がどこから生まれて、死んだ後にどこへ行くのかについては語るけれども、たとえば「神による魂の救済」とか「神による審判」とか「墮地獄」については一切語らない。〈光〉と〈闇〉、〈善〉と〈悪〉、〈豊穡・多産性〉と〈破壊・不毛性〉というような、対立する二つのものから成る生命原理があるだけであって、対立する二つの力、二つの原理の一方が他方を完全に打ち破り、死滅させるということは起こりません。第二に、このようにしてダヌー女神族がこの世からあの世に移り、霊的存在となって生き続ける場所が *sidh / sidhe* シーと名付けられた。ところがシーといういわば〈地下世界〉には、ダヌー女神族だけではなくて、邪悪なフォモール族が、少なくともその一部がすでにそれ以前から生き続けているらしい。のみならず P. W. Joyce によると、太古の昔からこの島の各地にいた神々もまた〈霊的存在〉〈妖精〉となって、ここに住んでいると言われます。¹¹⁾ アイルランドに今も残存する新石器時代・青銅器時代の墳墓は、そういう古代の神々の住まいであると信じられていました。それらの神々が地下の住まいから塚（シー）を通過して折々地上世界に現れ、人間たちの生活に介入するのです。

このように通常は死者と見なされる者たちが、完全に死滅するのではなく、姿形を変え霊的存在となって生き続けるという信仰、特にそれらが *sidhe* という〈霊的存在〉とか〈妖精〉として地下世界に生き続け、時折地上世界に現れて影響を及ぼすという考え方は、魂の不死 (*immortality*) についての信仰とともに、古代アイルランド人の死生観の中心にあると言えるでしょう。また〈大地〉は、死者たちの永遠の住処であると

いうよりも、むしろ新たな生命を生み出す母体であって、生と死を一つに結び合わせ合体させる神聖なものであると考えられていたのも、このような信仰の表れです。

周知のように古代アイルランドには、四つの大きな祭があります。祭の日取りと行事内容は、いずれも耕作農業と牧畜に関わる農事暦に従って定められていますが、ここでは最も大事な祭 Samain サヴァン（現代アイルランド語では Samhain サウイン）について、ドルイドとの関わりで重要な点をいくつか指摘しておきます。ケルト暦では1年の始まりが11月1日、それから次の4月末までの6ヶ月間を「暗い日々」、5月1日から10月末までの6ヶ月間を「明るい日々」と二分します。さらに「暗い」6ヶ月と「明るい」6ヶ月をそれぞれ半分ずつに区切って1年を4つに区分し、その節目毎に祭日が設定されている。サヴァンは旧年が新年に改まる10月31日夜から11月1日に行われる祭です。マカロックや P. W. ジョイスなどの説明によると、「夏の終わり」と「冬の始まり」を意味するサヴァンには、実にさまざまな対立概念が含まれていて、なぜ古代の人々がこの時期に祭を設定したのかが、よく納得できます。¹³⁾

対立概念の第一は、自然界の生命の循環と農作業の周期に関わるもので、植物や作物の成長・成熟・実りの周期がここで終わり、冬枯れの暗い時期が始まる。しかしそれは生命の不毛とか終末を意味するのではなく、収穫の喜びの思い出と、やがて始まる生命の新しい芽生えに対する期待を含んだ「暗い日々」です。農民にとっては、つらい労働の後にやってくる休息の始まりでもある。第二は過ぎてゆく旧年の汚れを祓い、また衰弱した旧年の生命に新たなエネルギーを注入して、新しい年を復活させようとする祈りがこめられます。この祭では聖なる篝火が焚かれ、その火が各戸の暖炉や竈に移される。それはエネルギーの象徴であると同時に、家畜たちを悪疫から守る浄めの意味合いを持っていました。

第三に、そしてこれこそが古代アイルランド人の宗教性を考える場合特に重要なのですが、サヴァンは死者たちを迎えるための祭だということ

す。旧年と新年が入れ替わるあわいとも言うべき10月31日の深夜のひとときは、通常的时间と空間の枠組みが崩れ、〈あの世〉と〈この世〉、〈自然界〉と〈超自然界〉との境界線がなくなり、地下の〈妖精〉とか〈霊〉＝シーが地上に出没する。シーは神秘不可思議な力を持っていて、ある種の人間には姿を見せるが、別の人間に対しては姿をくらますこともできる。そして、人間に幸運をもたらすよりも災いをもたらすことが多く、愛されるよりも恐れられた。たとえば穀物を枯らせたり、家畜を疫病で死なせる。あるいは特定の家に来て、その家の誰かに死が迫っていることを予示する場合もある。¹⁴⁾ そういう悪意と災いから身を守るために、あるいは邪悪な霊の不可解な振る舞いを鎮めるために、ドルイドの立ち会いの下に祈祷を捧げるとか、しかるべき動物を生贄に捧げることも行われた。一方、たとえば自分たちの先祖のようなよき死者に対しては、これを迎え入れてもてなすために酒食の宴がはられ、死者たちのよき意図と智慧の恵みを期待する風習もありました。サヴァンには〈他界〉からの強いエネルギーの流入が起こる。それは生者に憑依し、意識の壁を貫いて無意識の世界を現前させることもあれば、狂気の発作に襲われ乱行に及ぶ者もあり、いわゆる〈神隠し〉にあう者もあった。ドルイドは、このような「他界のエネルギー」「死者の呼びかけ」に強く感応することによって、他界の存在を受け止め、現世との橋渡しをする媒介者としての役割を担っていた。〈他界〉との接触を保ちつつ、その不可思議な力に翻弄されないために、人々はドルイドの霊力と智慧による導きを求めたと考えられます。

他界の観念と不死の観念

古代ケルトの神話や物語の世界では、すでに申し上げたとおり〈自然〉と〈超自然〉が密接不離の力を絶えず人間の行動と生活に及ぼしてきます。また〈この世〉と〈あの世〉、〈現世〉と〈他界〉という二つの世界がほとんど境を接して存在しているという実感がある。この世で死んだ者はあ

の世で再生し、あの世で死んだ者がこの世に再生してくるという生と死の相関関係が、日常茶飯のこととして信じられているという印象が強くなります。地上世界に生きる者と地下世界に生きる者との棲み分け、それを円滑に行うための知恵が日常生活の中に祭式や制度として定着しておりますが、人間であれ動物であれ、死が個体の完全な消滅を意味するものではないこと、植物における生命の循環に似た死と再生の循環が大きな生命の円環をなしていると、彼らは信じていたと思われます。

マカロックは、古代人の中で死後の世界、すなわち来世が何らかの形で存在することを疑った民族はほとんどいないが、来世について思い描く観念は民族によって非常に違いがあることを認めた上で、こう言っています。

古代人の中でエジプト人をのぞけば、ケルト人ほど墓場のかなたにある世界を熱烈に信じたものはいないし、その世界の喜びに心を奪われたものもない。彼らの信仰は……きわめて生き生きとした感覚性をそなえていて、死後も別の領域で肉体をもった生命が存続すると考えるところに特長がある。¹⁵⁾

最近の考古学的発見によると、ケルト人の埋葬儀礼や副葬品から見て、死後の生がどのような場所でどのような形で営まれるにせよ、現世と変わらない生命の存続が信じられていたことが示されています。魂の「転生」transmigration に関しては、人間の魂が犬とか兎、鳥とか小麦の粒に形を変えて再生するというピタゴラス的観念と異なり、ケルト的信仰においては、人間の魂は死んだ後あの世に生き続け、別の人間の身体に宿ってこの世に再生すると考えられています。魂の「不死」immortality の観念については、ピタゴラスの教説とケルト的観念との間に影響関係があったことを立証する資料は発見されていません。カエサルによると、ガリアのドルイドは人間の魂は不死であることを強調し、戦闘における恐れを知らぬ

ケルト戦士の勇猛果敢な闘争心をあおったと言う。¹⁶⁾ またこの世で返済できる可能性のない債務を、あの世で返済することを約束して願い出る習慣もあったと言われています。(これなどは現代人の社会通念からは到底想像できない「美風」と言うべきでしょうが、貧富の差の大きかった当時の社会においては、信仰に基づく契約であるだけでなく、貧者救済の効能もあったかもしれません。)

ドルイドの主宰する儀式のうち特に重要なのは、目的に応じた定めに従って毎年執行される動物の生贄の儀式であり、もう一つは、その真相に関していまだに不明な点が多いけれども、人身供犠の執行です。このほかドルイドに属する特権としては、特定の人間に対する^{タブー}禁忌の宣告があり、もしそれを犯せば運命が激変し、当事者を死に至らしめる geis ゲッシュ (*pl. geasa* ゲッサ) という呪術的力の行使があります。また、神の掟や共同体の法を破った者、反逆罪・殺人罪を犯した者に対して、ドルイドが呪いの言葉を浴びせかけると、当事者は身体的な損傷をこうむるだけでなく、部族社会から追放されました (*glám díceann* グラーム・ディーゲン)。興味深いのは、社会的に身分の低い者が、高位者に対して不正を告発し、自己の権利の確立と正義の実行を求めるために、拒食による抗議 (*troscadh* トロスカズ) が公認されていたことです。¹⁷⁾ このように、ドルイドをめぐる考察すべき問題はまだ数多くあります。また戦闘における勝者が敗者の「首狩り」 (*díchennad* ディーハナズ) を行う慣習がどのような意味を持っているのかも、ケルト諸部族の宗教性に関わる重要な問題です。時間の関係で今日は触れませんでした。これらについては機会を改めて考えたいと思います。さしあたり今日お話し申し上げたことの締めくくりとして、ケルト人の「他界」観と密接な関係にある死者埋葬の儀礼について、目立った特色をいくつか指摘しておきます。

死者は身体を洗い清められ、経帷子か巻き布に包まれて棺に納められた後、一夜かそれ以上にわたって通夜が営まれます。聖パトリックや Brian Boru ブライアン・ボルー (976-1014、マンスター王として在位) など身

分の高い者の場合は、十二夜に及ぶ通夜もあったと言う（高位の人物の場合、七日七夜が通例）。¹⁸⁾ 死者は他界においてよみがえると信じられていたので、弔いはまた祝賀の儀式でもあり、埋葬に先立って饗宴が行われ、次にゲームが行われた。埋葬に当たっては嘆きの^{キーン}泣唱 caoine (caoineadh = keening) が行われ、王族や戦士は武器を持ち、直立の姿勢か座位の姿勢で埋葬された。火葬にされた例もあるが、キリスト教伝来後は、仰臥の姿勢による土葬のみが認可されるように変化しました。カエサルによると、ガリアのケルト人は族長が死ぬと、火葬の際に罪人や捕虜、動物などを同時に焼いたと言う。¹⁹⁾ アイルランドでも動物を殺すこと、捕虜を生け贄にして埋葬するのはふつうの習俗であった言われています。そして、身分の高い王族とか戦士などの副葬品はきわめて豪勢で、生前そのままのきらびやかな服装、武器、何百リットルもはいる大釜、角杯、その他の料理道具に食事道具、ワゴン、タペストリーなどが整えられていたことが、考古学的発掘によって実証されています。これは死後の他界においても、現世と同じような生活が続くと信じていたことの表れだと言えるでしょう。このようなケルト人の信仰と習俗が、直接・間接にギリシア・ローマ人の知るところとなり、強い印象を与えたにちがいません。それを示す一例として、ローマの詩人 Lucanus ルーカーヌス (AD 39-65) の叙事詩から一節を引いておきます。ケルト人の習俗に対しても、ドルイドの特権的地位と行動に対しても、彼は共感を示していませんが、その死生観の根本はよく理解していたと思われます。

おお、ドルイドよ、血なまぐさい戦闘に終止符が打たれた今、諸君はまたしても野蛮な儀式、諸君の神聖にして野蛮な儀式と仕来りへと帰って行った。天なる神々と神性について真実を知っているは、諸君だけである言う。そうでないとすれば、諸君だけがこの真実について無知であることになる。はるかに遠い森の奥、そこの木立が諸君の秘密の住処。諸君の説くところによれば、死者の霊が赴くの

は、沈黙の国エレボスでもなければ、仄暗いプルートの館でもない。死者の霊は、それとは別のどこかよき場所で肉の衣をまとう、と言うのだね。そして、諸君の歌うことが真実であるとすれば、死は長いいのちの中間点であるにすぎない、ということになるのだね。²⁰⁾ (下線は引用者)

注

1) W. B. Yeats, "A General Introduction for my Work." *Essays and Introductions*, London: Macmillan, 1969, 513-514.

2) "The Black Tower" (1939)。その第1スタンザとリフレインは以下の通り(イタリック原文のまま、下線は引用者)。

Say that the men of the old black tower,
Though they but feed as the goatherd feeds,
Their money spent, their wine gone sour,
Lack nothing that a soldier needs,
That all are oath-bound men:
Those banners come not in.

There in the tomb stand the dead upright,
But winds come up from its shore:
They shake when the winds roar,
Old bones upon the mountain shake.

3) "Cuchulain Comforted" (1939)。

4) 論争の経緯・論点の概略については、たとえば次の文献を参照。Ed. Gillian Carr & Simon Stoddart, *Celts from Antiquity: Antiquity Papers 2*, Cambridge: Antiquity Publications Ltd, 2002; Barry Cunliffe, *The Celts: A Very Short Introduction*, Oxford: OUP, 2003; 南川高志『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』岩波書店、2003。

5) Stuart Piggott, *The Druids*, 27. (引用は鶴岡真弓訳による)

6) J. A. MacCulloch, *The Religion of the Ancient Celts*, 2-3.

7) アイルランドの Samain / Samhain に相当する祭日が、フランス東部 Coligny

コリニーで発見されたケルト暦（BC 2 世紀頃のものとして推定される）には Samonios と記されていて、元来は同じ祭が大陸のケルト社会にもあったことを示している。

- 8) ケルト社会の階層構造については、主として以下の文献を参照。Miranda J. Green, *Exploring the World of the Druids*, 98; P. W. Joyce, *A Social History of Ancient Ireland, vol.1*, 155-167; J. A. MacCulloch, *The Religion of the Ancient Celts*, 300.
- 9) Peter Berresford Ellis, *The Druids*, 170-171.
- 10) ある王国では、国王の就任式に雌馬が犠牲に供され、王となるものがその肉を食べ、血を飲み、馬体を煮込んだスープに身を浸し馬の豊饒な生命力と一体化することによって、王国の多産と豊穰を祈願した。Cambrensis, *Expurgatio Hibernica* (Peter Berresford Ellis 前掲書139を参照)
- 11) Miranda J. Green, *Exploring the World of the Druids*, 34-37; 松村賢一「ケルト入門 3 -ケルトの暦」48-51を参照。
- 12) ユリウス・カエサル「ガリア戦記」第六卷、(國原吉之助訳)『カエサル文集—ガリア戦記・内乱記』、94。なお同書の訳者注を参照。「ローマ神ディスは、ギリシアの神プルト（死と地界と夜の神）と、またガリアの神ケルヌノスと同一視される。そして、ケルヌノスもディスと同じく、すべてがそこから生まれ、そこへ帰って行く大地の創造力を賦与されて、『父』なる形容辞を伴う」、103。
- 13) J. A. MacCulloch, 258-264; P. W. Joyce, 264-266.
- 14) これは 'banshee' バーンシーと呼ばれる。近代においては女性の霊で、ある家の者に不幸や死が迫っている時、夜にその家の近くに現れ、悲痛なすすり泣きによってそれを予示すると言われる。
- 15) J. A. MacCulloch, 333.
- 16) ユリウス・カエサル「ガリア戦記」第六卷、93。
- 17) この制度に基づき、王に対する詩人の断食による抗議行動を描いたのが、W. B. Yeatsの劇、*King's Threshold* (1904) である。
- 18) P. W. Joyce, *A Social History of Ancient Ireland, vol.II*, 533-579.
- 19) ユリウス・カエサル「ガリア戦記」第六卷、94。
- 20) Lucan, *Pharsalia*, I,450-458, translated by T. D. Kendrick. Ed. John

Matthews, *The Druid: Source Book from Earliest Times to the Present Day*, 21. 『フェルサリア』の日本語訳はこの版による。なお月川和雄氏による『フェルサリア』ラテン語原典訳と注釈については、中沢新一・鶴岡真弓・月川和雄編著『ケルトの宗教 ドルイディズム』350-351を参照。

参考文献

- Bonwick, James. *Irish Druids and Old Irish Religions*. London: Griffith, Farran & Co., 1894/ Salem, NH: Ayer Company, Publishers, Inc., 1984 (rp.).
- Chadwick, Nora K. *The Druids*. Cardiff: University of Wales Press, 1966.
- Cunliffe, Barry. *The Ancient Celts*. London: Penguin Books, 1999 (OUP, 1997).
- Ellis, Peter Berresford. *The Druids*. London: Constable, 1994.
- Green, Miranda J. *Dictionary of Celtic Myth and Legend*. London: Thames and Hudson, 1992.
- Green, Miranda J. *Exploring the World of the Druids*. London: Thames and Hudson, 1997. ミランダ・J・グリーン (井村君江監訳) 『図説ドルイド』東京書籍, 2000。
- Gregory, Augusta. *Cuchulain of Muirthemne*. John Murray, 1902 / Gerrards Cross: Colin Smythe, 1970 (5th edition).
- Heaney, Marie. *Over Nine Waves: A Book of Irish Legends*. London: Faber & Faber, 1994.
- Hyde, Douglas. *A Literary History of Ireland*. London: T. Fisher Unwin, 1899 / Ernest Benn Ltd., 1967.
- James, Simon. *Exploring the World of the Celts*. London: Thames and Hudson, 1995. サイモン・ジェームズ (井村君江監訳) 『図説ケルト』東京書籍, 2000。
- Joyce, P. W. *A Social History of Ancient Ireland*, 2 vols. London: Longmans, Green & Co, 1903.
- Kendrick, Thomas Downing. *The Druids: A Study in Keltic Prehistory*. London: Methuen & Co., 1927.
- Kinsella, Thomas (trl.). *The Táin*. Dublin: Dolmen Press, 1969.
- Low, Mary. *Celtic Christianity and Nature: Early Irish and Hebridean Traditions*. Belfast: The Blackstaff Press, 1996.

- MacCulloch, J. A. *The Religion of the Ancient Celts*. Edinburgh: T. & T. Clark, 1911.
- Maier, Bernhard (trl. Cyril Edwards). *Dictionary of Celtic Religion and Culture*. Woodbridge: The Boydell Press, 1997. ベルンハルト・マイヤー (鶴岡監修・平島訳) 『ケルト事典』 創元社, 2001。
- Ed. Matthews, John. *The Druid: Source Book from Earliest Times to the Present Day*. London: Blandford Press, 1996.
- Piggott, Stuart. *The Druids*. London: Thames & Hudson, 1968 / 1975. スチュアート・ピゴット (鶴岡真弓訳) 『ケルトの賢者「ドルイド」』 講談社, 2000。
- Rolleston, T. W. *Myths and Legends of the Celtic Race*. London: George G. Harrap, 1911.
- Ross, Anne. *Pagan Celtic Britain*. London: Routledge & Kegan Paul, 1967.
- Spence, Lewis. *The History and Origins of Druidism*. London: Rider & Co., 1947 / Van Nuys: Newcastle Publishing Co., 1995 (rp.)
- ユリウス・カエサル (國原吉之助訳) 『カエサル文集—ガリア戦記・内乱記』 筑摩書房, 1981。
- 中央大学人文科学研究所編 『ケルト 伝統と民俗の想像力』 中央大学出版部, 1991。
- 中央大学人文科学研究所編 『ケルト復興』 中央大学出版部, 2001。
- 中沢新一・鶴岡真弓・月川和雄編著 『ケルトの宗教 ドルイディズム』 岩波書店, 1997。
- 松村賢一 「ケルト入門」 『英語教育』 大修館, 2001年10月—2002年3月。